

第12回 インター・ユニ・ゼミナール
Das 12. Interuniversitätsseminar für Deutsche und Japanische Kultur
開催のお知らせ

右記のプログラムにより、専門課程（大学院も含む）の学生を対象とした合宿ゼミナールを下記の要領で開催いたします。今回は、

『日常の中にひそむ政治
— ファシズムの「魅力」と美の意識 —』
Ästhetisierung der Politik am Vorabend des Nationalsozialismus

というテーマのもとに、今世紀前半のドイツにおける芸術と政治の問題を扱っていきたいと思います。テーマについての詳細は、別紙に解説を用意しましたので御参照ください。多くの学生の皆さんの参加を期待しています!!

1987年 6月

主催： Inter-Uni-Seminar 実行委員会
（代表： 吉島茂、大貫敦子、相沢啓一）
協力： Goethe-Institut, Tokyo
Deutscher Akademischer Austauschdienst

記

日時： 1987年 7月25日（土） — 30日（木）
所： ほとり荘（〒389-13 長野県上水内郡信濃町野尻湖 Tel: 02625-8-2606）
費用： 参加費 ￥30,000（5泊6日の宿泊、食事、パーティー、テキスト代、通信費などを含む。ただしプレ・ゼミの参加費は含みません。）
なお、参加費は現地で集めますので事前の入金は不要です。

募集人数： 約25名

申込締切： 7月8日

申込先： 〒260 千葉市弥生町1-33、千葉大学教養部ドイツ語教室
大貫敦子気付 インター・ユニ・ゼミナール宛

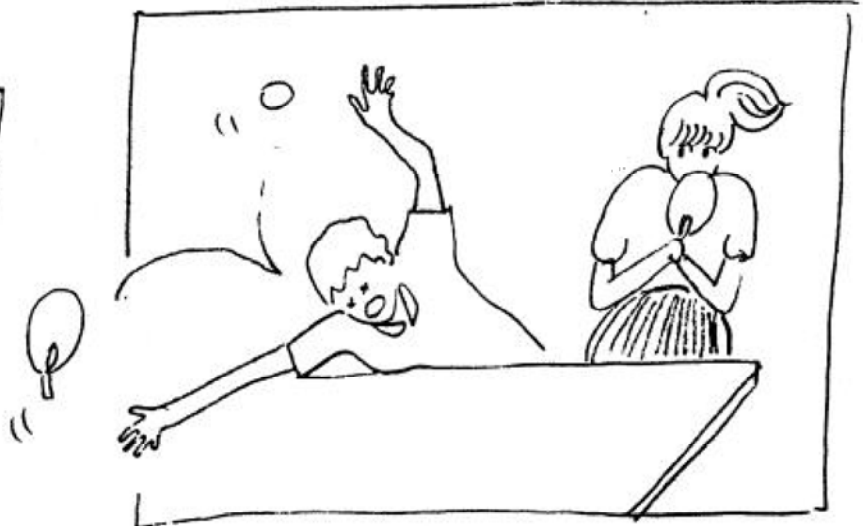
講師： 相沢啓一（青山学院大）、足立信彦（東北大）、大貫敦子（千葉大）、三島憲一（学習院大）、吉島茂（東京大）、他
Hans Ludwig Bauer (Goethe-Institut)、Wolfgang Brenn (立教大)、Gregor Haefliger (武蔵大)、Siegfried Kohlhammer (慶応大)、Engelhard Weigl (東京大) 他

- * 連絡・問合せは大貫(Tel:0472-78-4565)、または相沢(Tel:338-8050)まで。
- * ゼミナールでの使用テキスト、交通手段その他詳細は、7月初旬頃に、参加者の皆さんに追って連絡いたします。
- * 野尻湖花火大会のほか、休み時間中に、水泳、卓球、ピアノ、サイクリング、ボート、釣り、昼寝等が楽しめます。ただし、当ゼミは個人の事故等には責任を負いかねますので auf eigene Gefahr、各自十分に気を付けて下さい。
- * 全日程に参加できない場合などは、その旨なるべく早く事前にお知らせ下さい。なお、テキスト送付後にキャンセルの場合、それまでにかかった費用は負担して頂きます。
- * プログラム等に変更がある場合はご了承下さい。

プレ・ゼミのお知らせ

ことしのインター・ユニでは、特に学部学生の皆さんを対象に、ゼミの正規の日程に先だつプレ・ゼミを行いたいと思います。そこでは、ゼミのテキストを読み合わせて（特に語学的に）分からないところを考えたり、テーマについてどんなことが問題になりそうなのかを自由に話し合ってみる予定です。日本人講師の何人かが一緒にお手伝いする予定です。ひと足先に野尻に来て、ドイツ人抜き日本語だけで先ずはプレーン・ストーミングをしてみよう、という人は、気軽に参加してみてください。全くの自由参加、参加費は 5.000円で、7月24日の夕方からの開始です。

	24日(金)	25日(土)	26日(日)	27日(月)	28日(火)	29日(水)	30日(木)
		(Frühstück)	F R	Ü H	S T	U C	K
9		freiwillige Vorbereitung	Plenum Gruppenarbeit	Plenum Gruppenarbeit	Plenum/ Diskussion (Thema: noch nicht bekannt)	Plenum Gruppenarbeit	Evaluation
12		(Mittagessen)	M I	T T A	G E	S S	E N
1			Freizeit	Freizeit	Ausflug!	Freizeit	Heimkehr!
3	Einreise der Freiwilligen	Allgemeine Einreise-An	Gruppenarbeit	Gruppenarbeit	Ausflug!	Gruppenarbeit	
4		Einführung in das Thema	Plenum	Plenum		Plenum	
6	(Abendessen)	A B E N D E S S E N					
7	freiwillige Vorbereitung	Themen-überblick	Wasserfest! (Feuerwerk)	Video Wasserfest	Diskussion	Schlußfeier!!	
10	N	A C	H T	R U	H E	!?	



私たちは様々なものを「美しい」と感じます。桜の花、富士山の夕焼け、ミロのヴィーナス、ダヴィンチのモナリザ、モーツァルトの音楽、ナボリの風景、斉藤由貴にマドンナに……(?)。いや、美しいのはそうした、いわば「折り紙つき」の美だけに限りません。私たちは日常生活のいたる所で、たとえば、青春を白球に賭ける高校球児のひたむきな姿に、テレビ・コマーシャルでの自動車アクロバットに、あるいは朝礼で整列している中学生たちの秩序と統制に、また武士道における切腹シーンにすら、しばしば美を見出しています。こうした美の観念はもちろん、永遠不変で万国共通のものなどではなく、各時代毎、文化毎に大きく異なっていることは改めて言うまでもありません。

ところで、美のそうした相対性が単なる趣味の変遷の問題であるなら話は比較的簡単です。が、実際には美は、単なる個人的感覚や趣味や芸術の問題であることを越えて、様々な、思いがけない機能や役割を社会の中で担っていることが多いのではないのでしょうか。日常の中に潜んでいる無意識な美の感覚が何らかの政治的意味を持ち、歴史を動かす具体的な力となっていくことはないだろうか？

— 今年のインター・ウニはこの問いかけから出発したいと考えます。そしてこの問題を考えていく上で、今世紀初頭、ナチズムが登場する頃までのドイツは、まさに格好の材料をふんだんに提供してくれるようです。

たとえば1936年8月のベルリン・オリンピック。多くの選手が「政治とスポーツは無関係」だと考え(たが)るのとは裏腹に、オリンピックがすぐれて政治的イベントであることは今さら言を俟ちませんが、「前畑ガンバレ」のラジオ・アナウンスを通して当時多くの日本人をも熱狂させたこのベルリン・オリンピックはまた、政治的に利用され、政治的演出の見本市の場と化したオリンピックの、最も典型的な、そしてその最も早い例でもありました。ところで、このベルリン・オリンピックの記録映画、「民族の祭典」の監督をつとめたのは、有名な女流写真家レニー・リーフェンシュタールでした。この映画について彼女は、「スポーツを通して可能性の限界に挑む人間の肉体美を表現することを目指した」という意味のことを述べています。あるいはまた、ベルリン・オリンピックでの整然たる行進や、貴賓席の前を通るとき一斉に右手を高くまっすぐに上げる挨拶(いわゆる“*Heil-gruß*”= ナチズム式敬礼法)の「美しさ」は、日本の体育関係者たちをも大いに感激させたのでしょう。それら「成果」をさっそく高校野球などでの行進や選手宣誓にとりいれた彼らにとって、さしあたり眼に映ったのはそこに現出する「美」だけであり、オリンピックが確かに持っていた政治的な意味などは視野に入らなかったというわけです。こうした「純粹な美」や心地よい美的陶醉は、しかし実際には歴史の中で、彼らの思いもかけない政治的機能を担わされていたのです。

他方、美や芸術は政治などとは無縁なものだ、という意識が人々の間で根強ければ根強いほど、他方でそれを利用して美を政治的な表現手段にする勢力は力を伸ばします。政治的現実が美のカテゴリーによって語られるとき、そこに成立す

る美のイメージは現実を紛飾する虚構に成り下がりますが、この現象は、とりわけ今世紀にはいって顕著となってきました。日本でも、たとえば特攻隊で花と散った若き少年兵たちの死の美学は、(死んでいった彼らの意志とは無関係に)偽瞞に満ちた当時の政治実態を隠蔽することに貢献しました。こうした「ファシズムの美学」を今日の眼から糾弾し、過去の過ちとして否定するのは(既にファシズムに対する歴史的評価が決まっている以上)比較的簡単でしょう。しかし、「ファシズムの美学」を支えた当時のごく日常的な美的感性、その「無意識の内の美意識」は、いまだきちんと問題にされることのないまま、形を変えて現代まで生き延びているとはいえないでしょうか。たとえば、今の日本で盛んにテレビのコマーシャルを通してふりまかれる、素敵な(?)男性の演じる「男の美学」や、美しい風景をバックに語られる「日本の未来を演出します」という商社の宣伝文句——これらが果してベルリン・オリンピックの演出とは全く別物である、と私たちは言い切ることができるでしょうか。このように、私たちの日常的な美の意識は、それが私たちにとって自然であたりまえのものであればあるほど、そこに潜む問題はアクチュアルである、といえるようです。そうした点もまた、今の私たちをとりまくコマーシャルや映画などの分析を通して一緒に考えていきたいと思ひます。

以上のような思考に基づいて、今年の夏のインター・ウニでは、今世紀初頭、第二次世界大戦にいたるまでのドイツにおける芸術と政治の問題から出発しながら、現代日本の私たち自身の美的感性の自己分析に至るまで、美と政治の関係を幅広く扱っていききたいと思ひます。ニーチェやブレヒト、ゴットフリート・ベンやエルスト・ユンガーやベンヤミンらのテキスト、あるいはまたリーフェンシュタールの映画や、当時のアウトバーンや建築物など日常風景の中にひそむ美学、そして三島由起夫や保田与重郎ら日本のテキストやコマーシャルなども検討し、ディスカッションをしていききたいと思ひます。ところで、いろいろ申し上げましたが、例年のインター・ウニを御存知の方であれば、もちろんそれによってしりごみしたり、恐れをなしたりはなさらないことと思ひます。ゼミでは、難しい点、分からない内容は懇切に教えてくれ、また言葉の点で苦しいときには通訳まで引き受けてくれるやさしい(?)先輩にも事欠きません。できるところまではドイツ語を使いながら、各自の専門や言葉の制約をお互いにカバーし、助け合い、補い合って議論を進めていく場が私たちのインター・ウニですから、3、4年生の皆さんも安心して積極的に参加してみてください! なお、ゼミについてまだあまりよく知らない、という方のために、インター・ウニがどういうものかを紹介した記事を別紙に転載しておきますので参考にしてください。それでは夏の野尻で会いましょう!!





Interuni-Seminar / インターユニ・ゼミナール

インター・ユニってなんだろう？ 変な名前だなー——そう思われるのも無理はありません。なにしろ「インター」は Inter, 「ユニ」とはなんと Universität のことなので。この「Inter」というキー・ワードが実は、ゼミの精神を一身に担ってくれています。いわく、いろいろな大学から様々な人間が集まってくる „Inter-Uni (versität)“ !! のみならず、あちこちの専門領域に首を突っ込んでかき回そうという inter-disziplinär な精神、それにドイツと日本を比較対照させて inter-kulturell に扱おうという魂胆、はたまた、教師と学生、ドイツ人と日本人、学問と遊び、批判と建設…等々の間にありがちな不要な境目を大胆にとっばらって „Inter“ な精神を発揮しようという場、すなわちこれ “インター・ユニ”, という訳なのです。

ところでこのインター・ユニ、だいぶ大所帯となったので今は大きく「ジュニア」と「シニア」に分かれています。ジュニアの方は大学一年から四年生が中心で、毎春三月、富の東北は白河郊外でのドイツ語訓練のための合宿がメイン・プログラム。対するシニアの方は大学三年生から大学院生が中心で、毎年七月下旬の約一週間、野尻湖ほとりに集まっては日夜ディスカッションに明け暮れます。……いえいえ恐れるには足りません！ ここ数年のシニアでのテーマは「日本のドイツ像、ドイツでの日本像」、「ロマン派」、「19世紀ドイツの文化的アイデンティティー」といったものですが、いずれのテーマにせよ、身近な題材から思いがけないテキストに至るまで、最高の選りすぐりのネタに、当ゼミ特製の „Reflexivität“ のソースをたっぷりかけてみんなで料理して味わう味は格別！

つとに好評を博してきました。本年夏のテーマは、「芸術の中にひそむ政治」という方向で、主に今世紀初頭のドイツを扱うことになるかと予想されますが、しかし一部に、今年こそ „Liebe“ をテーマとすべきだという意見も根強く、さあ一体どうなるでしょうね。

いずれにせよこのインター・ユニ、ドイツのことを扱いながら、各自の狭い専門や大学や言葉の枠を超えて自由な意見を交換しようという、広く開かれた集まりです。そんなのまだ知らない、という人がいたら、一度のぞいてみませんか。月々の例会である Monatstreffen のことも含め、最新の Information は下記にお問い合わせ下さい。

